

緑のカーテンづくりをツールとした世代間交流の実践と課題

—緑化コミュニティ構築に向けたプログラム開発—

廣田 有里*・土屋 薫**・林 香織***

要 約

高度成長期に流山に住居し始めた高齢化が進む旧住民と、「母になるなら流山」というキャッチフレーズで子育てのしやすさを打ち出し、近年、流入してきた子育て世代（新住民）を、双方の持つ社会的資源の交換を促すことによって、魅力的な、まちづくりの担い手となっていくと考え、「ゴーヤ」をツールとして交流させた。

本研究で明らかになった点は、①世代間交流のツールとしての「ゴーヤ」の有用性と限界②プログラムに関わる資源に対する重要性の確認不足③プログラム実施結果、関係者が受け取るインセンティブの不平等、である。

本研究によって、「ゴーヤ」というツールを用いての世代間交流の場を設けることは可能性の一端は確認されたが、課題が明確になったため、今後の改善がのぞまれる。

キーワード：世代間交流、学童保育、観察プログラム

はじめに

日本では少子高齢化が進み、平成 25 年 10 月 1 日調べ(内閣府平成 26 年度版高齢社会白書)では、65 歳以上の高齢者人口の総人口に占める割合（高齢化率）は 25.1%と過去最高を記録している。高齢者人口増加の中、高齢者の社会活動への参加も活発で、自主的なグループ活動への参加は、10 年前に比べて 6.2%の増加がみられる。その一方で、少子高齢化に伴い、高齢者層と若者層の日常的な交流機会が減り、地域コミュニティが弱体化していく傾向もみられている（2014, 廣田）。

高齢者は、「自治会」といった地区ベースの社会関係資本を築く一方で、子育て世代は、対面・SNSなどをうまく使い分けて社会関係を広げて

いく。この双方の持つ社会的資源の交換を促すことによって、魅力的な、まちづくりの担い手となっていくと考え、参与観察を行うこととした。本論文では、1970 年代の高度成長期に流山に住居し始めた高齢化が進む旧住民と、「母になるなら流山」というキャッチフレーズで子育てのしやすさを打ち出し、2000 年代に流入してきた子育て世代（新住民）を、「環境モニタリング」をツールとして交流させた試みと、その結果を報告する。

1. 背 景

筆者らは、環境のモニタリングを行う市民を、まちづくりの担い手としてとらえ、モニタリングスキル向上の方法論を模索してきた（恵ら, 2013）。その中で成果を挙げているのが、流山市美田地区の「NPO 流山ゴーヤカーテン普及促進協議会（以下、ゴーヤクラブ）」である。夏場の電力削減を目標とした緑のカーテン作成と、温度測定などの環境モニタリングスキルだけでなく、その成果をインターネットを通じて発信していく

2015 年 11 月 30 日受付

* 江戸川大学 情報文化学科准教授 ソフトウェア工学

** 江戸川大学 現代社会学科教授 レジャー社会学

*** 江戸川大学 マス・コミュニケーション学科専任講師
社会学, コミュニケーション学

スキルもあわせて向上していることが確認された。しかし、美田地区を長年にわたり強力なリーダーシップのもと束ねてきた松島英雄会長の交代、自治会の高齢化といった課題が浮かび上がっている。

そこで、モニタリングスキルは高いが高齢化が進む美田地区のメンバー（旧住民）と、流山市のマーケティング戦略によって流入してきた子育て世代（新住民）をつないでいくことを目的として、そのためのツールとして「環境モニタリング」を用い、「ゴーヤの育て方や、育てる意義」などについて高齢者がレクチャーする場をマネジメントし、子育て世代にはSNSを利用した情報発信を行うよう促すなど、両者が交流する場を設定したうえで、参与観察を行った。

2. 先行研究の整理

厚生労働省によって策定された「放課後子ども総合プラン」⁽¹⁾は、増加する共働き家庭の子どもたちに対する放課後教育の重要性を説き、放課後児童クラブ、いわゆる学童の整備を掲げ、各市町村に対する行動計画策定指針や、放課後の学校教室の解放やそれに伴う責任の所在などを明らかにするなどの対応策を示すものである。具体的施策である一方、学童の増設に伴う、人材の雇用や養成には、時間も経済的投資も必要であるため、このやり方が定着するまでの障壁は高い。そこで、保育、社会学といった学術領域では、ここ数年、学童に地域の高齢者を招き、世代間交流をはかる実践的研究の報告が増加している。

そもそも、子育てを地域の高齢者がボランティアとして見守る動きは、町づくりの観点から学際的領域での事例研究報告が数多く挙がっている。小石らは、子育て支援ボランティアの活動に着目し、ボランティアをする側、される側の意識調査から、両者の間に地域ぐるみで子育ての輪を広げている、子育てを地域みんなで支えている実感を持っていることを明らかにした（小石ら,2014）。つまり、ボランティアスタッフである地域の高齢者が聞き役となることで、子育て中の母親世代に

安心や安らぎを与えるという、世代間交流が生まれる。これが「地域を支える」という共通意識を生むと考えられる。参加者に共通した意識や感覚の共有が生まれることが、こうした活動の満足度や継続性の原動力となる。

一方、学童と高齢者の交流を通じて得られるものは、世代を超えたネットワークであり、ソーシャル・キャピタルを中心に議論を進める傾向が多くみられる。なお本稿におけるソーシャル・キャピタルは、Putnam に従い、「調整された諸活動を、活発にすることによって社会の効率性を改善できる、信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴」と定義しておく（Putnam,1993）。例えば、村山らは、高齢者の地域活動についての継続性や行政と地域住民との協働の重要性を説き、そうしたプログラムの普及による多世代交流が、ソーシャル・キャピタルの醸成につながることを見出した（村山ら,2013）。しかし、ソーシャル・キャピタルの醸成のような人的資源を手に入れることは、長い目でみれば財産であるが、子育て支援ボランティアのような、その場で問題が解決するといった短いスパンでのインセンティブとはいえず、利益を享受したという実感は少ない。

実際、学童と高齢者の交流をはかった森田らは学童保育における世代間交流の継続的实践から、12 カテゴリーの課題を見出した（森田ら,2015）。それらは、学童保育（運営や指導員）、子ども、高齢者、子どもの保護者、学校関係者、プログラム企画者、運営者といった多様な関係者が存在しており、関係者の合意形成を得ることの難しさ、そして、関係者の目的意識や、利益についての考え方の方向性の違いを問題視するものである。これに関連し藤原は、学童における世代間交流プログラムを普及させるために、参加者に何らかのインセンティブをもたらしことの重要性を説いている（藤原ら,2012）。

高齢者が学童に入るメリットは時間的余裕や地域社会との接点作りであると考えられるが、受け入れる側である指導員のメリット、子どもは何を受け取るべきであるのか、問題の所在は先行研究で明らかになっているものの、具体的解決策に関

する成果はまだ少ない。よって、本研究では実践的な手法により、問題を具体化し、参加者にメリットを与えるプログラム開発の検討を行っていく。

3. 調査概要

3-1 対象

3-1-1 流山市美田地区

流山市美田地区は、流山市の中央東側に位置し、柏市に近接する。元は、日立グループの不動産会社である中央商事株式会社（現株式会社日立アーバンインベストメント）により宅地造成された日立製作所社員向けの住宅地である。現在も、住民の約75%が日立グループ会社の社員もしくは退職者およびその家族であることが大きな特徴である。同じ組織に所属している場合、組織に対する誇りや愛着が元から存在しており、美田地区は、組織に対する誇りや愛着から、地域コミュニティに対する誇りや愛着を育てやすい環境にあったといえる。

昭和46年（1971年）5月1日に「美田」という地名が誕生し、昭和49年（1974年）3月に自治会が発足した。現在は6代目の元川氏が平成27年より会長を務めている。前会長であり、現名誉会長を務める松島英雄氏は、10年の任期を務めて、地域活動に大きく貢献してきた。

美田地区は、平成26年度4月1日調べでは、高齢化率が40.9%と非常に高い（流山市ホームページより筆者が算出）。地域で活躍している世代は、70代が中心となっており、次世代のコミュニティの担い手が育っていないという懸念がある（2014、廣田）。

美田地区では地域コミュニティ活動が盛んで、温暖化防止・環境活動としてゴーヤによるグリーンカーテン作成を推進する「グリーン・ぐりーん大作戦」もそのひとつである。平成21年11月には、温暖化防止を目的にした千葉県地球温暖化防止活動推進センター主催「CO2CO2（コッコッ）ダイエット」選考会で最優秀賞に選ばれ千葉県代

表として全国大会へ出場した。平成22年2月に東京で開催された環境省主催の「ストップ温暖化一村一品大作戦」全国大会では千葉県代表として発表し、環境大臣より「優秀賞」を受賞した。その後、流山市全体にグリーンカーテンを普及させる運動を行う団体として、「NPO 流山ゴーヤカーテン普及促進協議会（通称：ゴーヤクラブ）」が誕生し、美田地区のメンバーを中心に活動を行っている。

3-1-2 学童施設そよかぜルーム

「学童施設そよかぜルーム」は、流山市のNPO法人「Rise up（女性サポート実行委員会）」が運営する学童施設のひとつである。

「Rise up（女性サポート実行委員会）」は、子育て中の女性にも輝ける場を提供することを目指し、個人が持っている資格や経験を生かせる場を見つけるため、社会関係資本を築く手伝いをするを掲げている団体である。主な活動として、子育て中の女性が参加できる講座やサロンの運営、情報誌の発刊、講座やショップ開催の補助、学童クラブの運営がある。

本論文で対象とする「そよかぜルーム」は、「Rise up」の運営する学童施設のひとつであり、流山市立八木南小学校校舎内の1室を借りて運営している。八木南小学校は、流山市芝崎にあり、流山市の南側に位置する。

学童施設を利用する児童の人数は26名で、学年別の内訳は、4年生2名、3年生8名、2年生8名、1年生10名となっている。指導員の人数は、常勤1名とパート3名の4名で、常時2名の指導員が勤務している。保育時間は、授業終了後から19:00までで、授業のない土曜日や長期休暇中の保育時間は7:30～19:00となっている。

3-2 実施プログラム

「ゴーヤカーテンの観察会や自由研究を通して、ゴーヤカーテンの役割と研究の楽しさを知ってもらう」ことを学童保育での表向きの目標とし、表

1に示すスケジュールでプログラムを実施した。

表1 ゴーヤカーテン観察会の学童保育プログラム

日付	内容
5月29日	ゴーヤの苗植会 ゴーヤクラブによる「ゴーヤの育て方講習会」 カレンダーへの気温と成長の記録の方法説明 と記録開始 定点カメラの設置
6月20日	そよかぜルーム保護者会で、ゴーヤカーテン 観察会の取り組みの案内を配布してもらう
7月23日	ゴーヤクラブによる「熱環境・温暖化防止の 講習会」 ゴーヤクラブによる「ゴーヤの観察会」 プログラムをサポートする学生と児童の顔合 わせ 観察の記録の作成
7月30日	大学プログラム ゴーヤの観察「見る、切る、 味わう、考える」 ゴーヤアイスの試食 ゴーヤレシピ冊子とゴーヤクラブの案内を保 護者に配布
8月18日	大学プログラム 「ゴーヤ観察のまとめ講習 会」 ゴーヤ観察のまとめの新聞の作成 流山市のゴーヤカーテン見所マップの配布

3-2-1 ゴーヤの苗植会

まず初めに高齢者と学童の子どもたちをつなぐツールである「ゴーヤ」を育て、成長を共有するための「ゴーヤの苗植会」を5月29日に実施した。この苗植会は、両者の初顔合わせとなるばかりでなく、指導員やプログラム企画者の、交流の場として設定した。ゴーヤクラブのメンバーにとっては、知識の提供の場および、地域の将来的担い手である子どもとの接点で、一方の児童にとっては、ゴーヤクラブメンバーからの知を享受し、「地域のおじさん」との接点が構築されることを期待するものである。

「ゴーヤの育て方講習会」では、「ゴーヤ苗植え付け後の育て方」というタイトルの、写真や絵を使用した紙芝居で「水やりを忘れない」や「てきしんをしよう！」等の内容を説明がされ、収穫までの様子が紹介された(図1)。その後、ゴーヤクラブの指導の下、児童たちは学童保育の教室の前に15本の苗の植え付けを行った(図2)。

この日より、毎日、児童たちは気温と成長の記

録用紙(図3)への記録と、ゴーヤへの水やりを開始した。

気温の記録用紙として、図3に示すような温度と天気が記入できるカレンダーを外気温と室内気温用の2セットを用意した。児童が飽きずに気温の測定を継続できるように、ゴーヤクラブのキャラクターである「ゴーヤちゃん」を配し、天気を



図1 「ゴーヤの育て方講習会」の様子



図2 苗の植え付けの様子

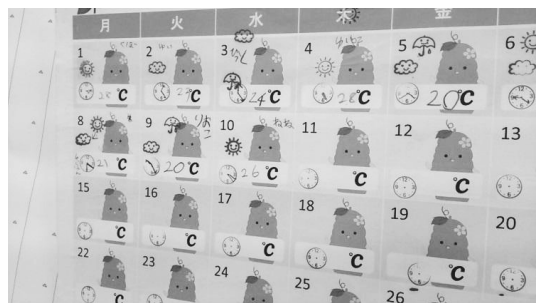


図3 気温の記録用紙

判子で押せるように準備した。

成長の記録用紙として、1週間に1回、ゴーヤが伸びた高さを記録できるグラフを用意した。ゴーヤの成長を体感できるように紙テープでゴーヤの高さを測り、そのままグラフに貼り付けて記録できるようにした。

3-2-2 保護者への案内

「ゴーヤ」を育てている子どもを通して、高齢者と子育て世代をつなぐため、保護者向けの案内を作成した。保護者へゴーヤカーテンを育てていることに興味関心を持っていただき、最終的にはインターネット等を通じてゴーヤクラブのメンバーと交流できるようになるための第一歩とすることが目的である。

「夏休みの自由研究に向けた子どもたちとの取り組み」というタイトルで、江戸川大学内の研究チームとゴーヤクラブが協力して、「緑のカーテン」の普及と、それに伴う環境への気づきをもってもらう活動を進めてきたこと、流山市内の小学校に「緑のカーテン」を設置していること、ゴーヤカーテンの育成と観察を通して考えること、研究することの楽しさを知ってもらいたいと考えていることを伝える内容で作成した。

本案内は、6月20日に実施された保護者会で配布し、Rise up より説明を行っていただいた。

児童が学童保育中に行ったゴーヤカーテンの観察と実験の内容を、夏休みの自由研究という形で家庭で仕上げることにより、保護者のゴーヤカーテンへの関心が高まり交流が活発になることがねらいだったが、自由研究には各家庭のこだわりがあり、ゴーヤカーテンの観察を取り入れていただくことが難しかった。そのため、プログラムの内容を「自由研究に向けた取り組み」から「ゴーヤにより地球環境に関心を持ち、研究の楽しさを知ってもらう」内容に変更した。

3-2-3 熱環境・温暖化防止の講習会とゴーヤの観察会

児童にゴーヤのもたらす涼しさと地球環境への寄与を学び、継続的関心を持ってもらうため、7月23日に「熱環境・温暖化防止の講習会」を行った。

「熱環境・温暖化防止の講習会」では、ゴーヤクラブより、地球温暖化の問題と、ゴーヤカーテンの有効性を説明した。地球温暖化というテーマは、小学校低学年には難しい話であるため、写真や絵を多く使い、「ゴーヤの実の数当てクイズ」やゴーヤカーテンに囲まれた協議会名誉会長の自宅写真をはさんで、飽きさせない工夫を行っていた。

講習会終了後、ゴーヤクラブメンバーと児童とで、観察するテーマを「つるの巻き方」と「雄花と雌花の違い」とし、ゴーヤカーテンの観察会を行った（図4）。フリーフォーマットでまとめた



図4 ゴーヤカーテンの観察の様子

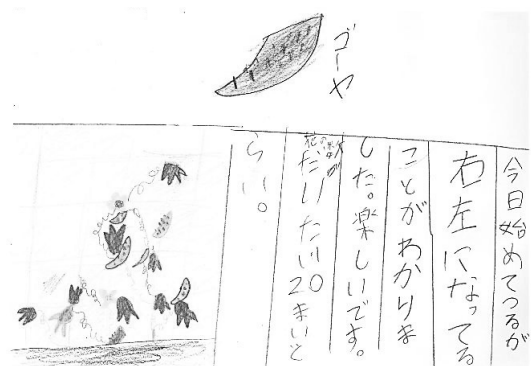


図5 ゴーヤカーテン観察日記の一例

ヤクラブの活動の案内のリーフレットも配布した。リーフレットにはゴーヤクラブのホームページと Facebook ページの案内も掲載されており、インターネットでの交流の橋渡しとする狙いもある。

3-2-5 ゴーヤ観察のまとめ

8月18日に、今までのゴーヤ観察の記録を振り返るまとめの会を行った。ゴーヤを育て、環境について考えた記憶を確かなものするための、振り返りの作業である。

大学側から、「児童が育てたゴーヤの成長の過程」・「ゴーヤカーテンをサーモグラフィーカメラで撮影した写真」・「今まで記録してきた気温と成長のグラフ」により、ゴーヤカーテンを育てて、児童たちの周りにどのような変化が生まれたかを考えるための材料を提示した。その後、グループワークで、観察してきた様々な材料を自分たちなりに組み合わせ、まとめの新聞の作成を行った(図7)。

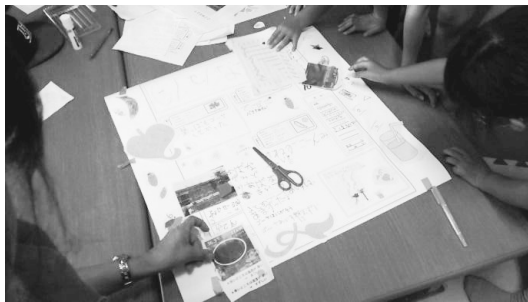


図7 ゴーヤ新聞作成の様子

まとめの新聞のフォーマットは、図8に示すように、最上部に大見出しを作り、新聞全体のテーマを記入できるようにした。1段目の左と3段目の右には、写真やグラフを貼ったり、絵を描けるようなスペースとした。3段目左に、四コマ漫画を記入するスペースを用意した。

最上部に大見出しを設定することにより、新聞のテーマをグループで最初に決定し、共有しながら他の部分の作成を行えることができた点が良かった。大見出し以外の枠組みについては、児童た

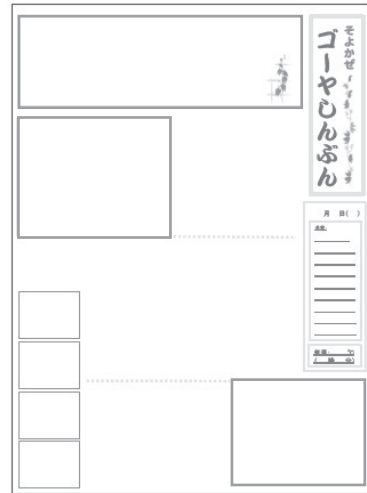


図8 ゴーヤ新聞フォーマット

ちは枠組みを気にせずに記入や貼付を行っていたため、フリーフォーマットでも良かったように思う。印刷の都合で、フォーマットの左右に余白ができてしまったが、低学年の児童がその部分に絵を描いたり、ゴーヤクラブのキャラクターであるゴーヤちゃんの絵を貼って参加できるスペースとなりよかった。

まとめの新聞を作成することにより、夏の間に児童が行ってきた水やりや気温の測定、成長の記録を、児童が理解しやすい形式にまとめることができ、記憶に残る作業になった。

また、保護者に学童で行っているゴーヤの取り組みに関心を持っていただき、交流を活性化させる取り組みの一環として、市内の公共施設でゴーヤカーテンを育成している場所と見所を記載した「流山ゴーヤ見どころマップ(図12)」を大学で作成して児童に配布し、家に持ち帰って家族と見

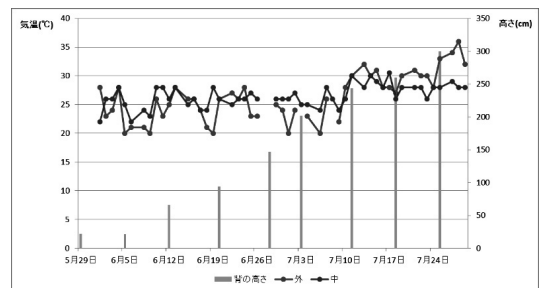


図9 観測結果のまとめのグラフ

学に行っていただくように促した。

次に、参考までに児童に提示したコンテンツについて説明する。

図9に観測結果をグラフにまとめたものを示す。

成長の様子を記録し、タイムラプス動画作成のために設置した定点カメラの設置方法を図10に示す。1時間に1回の撮影を実施し、設置期間におよそ1800枚の写真を撮影した。

しかし、カメラを屋内の設置可能な場所で撮影したため、窓ガラスの状態によりピントが合わなかったり、かなり遠くからの撮影になり、よく成長を撮影できたとは言いがたい。今後は、屋外にカメラを設置できるようにすることが望ましい。

図11に、サーモグラフィーカメラでゴーヤカーテンの表面温度を測定した写真と普通のカメラで撮影した写真との対比を示す。サーモグラフィーカメラによる対比は児童に分かりやすく、訴求力が高かった点で有効であった。児童がすごす教室にゴーヤカーテンがあるときとないときで比較



図10 定点カメラの設置方法

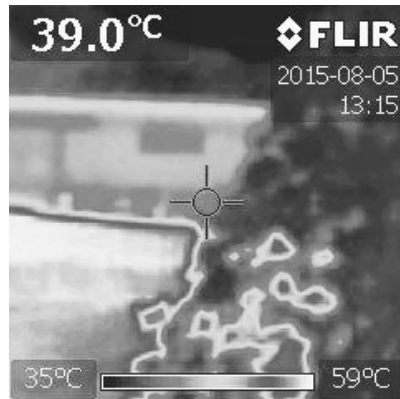


図11 サーモカメラと普通カメラの比較

できるとより効果的であったが、サーモグラフィーは表面温度を計測するため、ガラス窓は比較的温度が低くなってしまい、用途に合った写真は撮影できなかった。

図12に「流山ゴーヤ見どころマップ」を示す。児童とその家族が、流山でのゴーヤの取り組みに興味を持ち、実際に足を運んでいただくことを目的に作成した。ゴーヤカーテンを積極的に育てている流山の公共施設について、実際に足を運んで調査・写真撮影し、見所を確認している。



図12 流山ゴーヤ見どころマップ

インターネットが交流の場となるように、紙媒体と同時に GoogleMap でも作成し、Facebook でも公開した。普段のゴーヤクラブの Facebook での記事は、通常 100 リーチ前後である中で、500 近いリーチ数を記録し、一般的には高い関心を寄せていただいた。

3-3 SNS による交流

そよかぜルームが普段から児童の様子を家庭に知らせるために「そよかぜブログ」というブログを使用している。一方、ゴーヤクラブでは Facebook を使用して活動の報告を行っている。

「そよかぜブログ」でそよかぜルームの指導員の方にゴーヤカーテンの育成の様子を公開してもらい、ゴーヤクラブのメンバーに閲覧して、育成状態についてアドバイスしていただくようお願いした。表 2 に、そよかぜルームからの交流働きかけと、ゴーヤクラブからの働きかけ、それに対する応答をまとめた。

期間中、「そよかぜルーム」のブログは 5 回更

新された。1 回目の更新時、そよかぜルームからゴーヤクラブの Facebook ページに書き込みがあった。ブログのリンクと、今後、ブログで成長を報告するのでアドバイスをいただきたいとの内容であった。その書き込みに対し、流山ゴーヤカーテン普及促進協議会から「いいね！」を押下しており、交流の確認ができる。その後、ゴーヤクラブのメンバーから育成のアドバイスをそよかぜブログに書き込もうと試みるが失敗していることが、6 月 11 日のメールよりうかがえる。この失敗の原因は、そよかぜブログの設定がコメントの表示をブログの管理者が確認してから表示する設定になっていたためであり、そのような書き込みには 1 ステップ必要な場合は、そよかぜルームのスタッフ、ゴーヤクラブのメンバー、保護者が交流する場としては、踏まなければならないステップが多すぎたと考えられる。その後、両者は接点を持つことなく、独自に情報発信を行っている。もともと、そよかぜブログは保護者に対しても一方通行のツールであったため、交流の場とし活用するのに適していなかったといえる。

表 2 SNS での交流の履歴

日付	そよかぜルームから	接点	ゴーヤクラブから
6 月 1 日	ゴーヤクラブの Facebook に投稿「ゴーヤカーテンを作り始めたこととアドバイスをブログで欲しいとのこと」	ゴーヤクラブより投稿に「いいね！」押下	
6 月 11 日		RiseUp 代表から返信「確認してみます」	会長より RiseUp 代表宛にメール「ブログ拝見してコメントしたいが、コメントがうまく入れられない」
7 月 10 日			Facebook 更新「ゴーヤカーテン育苗状況を見てきました。(八木南小学校)」
7 月 23 日	ブログ更新「ゴーヤの会の様子の報告と、ゴーヤの収穫が順調で、持ち帰っているお友達もいるとのこと」		Facebook 更新「「ゴーヤの話」「ゴーヤカーテン観察会」そのご「感想文」書きを行いました。子供とふれあい、童心に返った半日でした。」
7 月 30 日	ブログ更新「ゴーヤの会の様子の報告。ゴーヤのことを勉強し、ボランティア学生と遊んだこと、ゴーヤアイスの感想等記述」		
8 月 1 日	ブログ更新「ゴーヤや外気測定の写真とゴーヤの収穫報告」		
8 月 10 日	ブログ更新「ゴーヤが心配で水やりに来た」		
8 月 11 日	ブログ更新「リアルゴーヤちゃんの写真」		
8 月 17 日			Facebook 更新「ゴーヤの見どころマップ」

また、ゴーヤクラブのFacebookの記事を見ても、SNSを使用していながら、ほぼ一方通行の情報発信にとどまっており、インターネット上で双方向のコミュニケーションを行うスキルを獲得しておらず、全体として情報交換の場の設定が準備不足であった。

4. 課題の内容と分析

上記取り組みを行い、以下のような課題が浮き彫りになった。

- 1, 保護者の関心がそれほど高まらず、ゴーヤを通しての交流は活発にならなかった。
- 2, 学童保育スタッフや児童の保護者、ゴーヤクラブ関係者等、プログラム関係者たちが交流する場として設定したブログが十分に機能しなかった。
- 3, プログラムにおける教育的配慮が充分ではなかった。

当初、ゴーヤカーテンの観察と実験の内容を、夏休みの自由研究という形で家庭で仕上げることにより、保護者のゴーヤカーテンへの関心が高まり交流が活発になることがねらいだったが、自由研究には各家庭のこだわりがあり、ゴーヤカーテンの観察を取り入れていただくことが難しかった。そのため、プログラムの内容を「自由研究に向けた取り組み」から「ゴーヤにより地球環境に関心を持ち、研究の楽しさを知ってもらう」内容に変更した経緯がある。その後もゴーヤクラブのリーフレットの配布、ゴーヤレシビ冊子の配布、ゴーヤ見どころマップの配布を行い、保護者に働きかけたが、ゴーヤクラブのFacebookページへのアクセスも記録されず、交流の動きが見られなかった。

原因としては、家庭が学童保育に望むことは、児童が学術的興味関心を上げることでなかったため、児童と家庭の間に立つ指導員にも、児童が学術的興味関心を上げることに割く労力がなかったためと考えられる。

そよかぜブログが交流の場にならなかった原因

は、そもそものそよかぜブログの使用のされ方が、運営側からの一方的な児童の様子の報告にとどまっていたこと、ゴーヤの活動の報告がされる前は、しばらくブログの更新がなされていなかったもので、恒常的な閲覧者がいなかったことが考えられる。また、ゴーヤクラブでは、普段の活動報告をFacebookで行っていたため、同じコミュニケーションフィールドに立てなかったことも原因と考えられる。

教育的配慮がなされていなかったとは、熱環境・温暖化防止の講習会において、児童に考える機会を与えずに答えまで教えてしまった点である。原因は、大学側からの伝達不足もあり、プログラムの到達目標について、あらかじめ話し合いを持つべきだった。

今回のプログラムにおいて、ゴーヤクラブは、地域社会の将来的担い手との接点ができ、知識の伝達ができ、満足感が得られている。今後、小学校へのゴーヤカーテンの普及と教育に主眼をおいての活動の展開を考えている。

一方、学童の児童は、知識の受容は為しえたが、地球温暖化に寄与するゴーヤカーテンの役割を理解しているかは不明である。また、ゴーヤカーテンの育成、ゴーヤクラブのメンバーや学生ボランティアとの交流はその場限りで継続性がない。ただし、日頃学童と関わらない人たちの来訪による驚きと楽しみ、五感に訴える体験により、ゴーヤと取り組んだ記憶が残る。

以上の点を総合的に考えると、双方向の継続的な交流が実現できなかったことが今後の課題といえる。

ま と め

本研究で明らかになった点は、以下のとおりである。

- 1, 世代間交流のツールとしての「ゴーヤ」の有用性と限界
- 2, プログラムに関わる資源に対する重要性の確認不足
- 3, プログラム実施結果、関係者が受け取るイン

センティブの不平等

植物としての「ゴーヤ」を共に育てて観察するという共有がなされるため、これを用いた世代間交流の場を設けることは可能である。しかしながら、学童保育に家庭が望むことは、児童が学術的興味関心を上げることでなかったため、このシステムの有用性が十分に理解されたとはいえない。

また、本プログラムでは、交流するためのプログラムや熱環境を教えるためのスライド、学ぶ場など、様々な資源は用意し、それに携わる人的資源もネットワーク化したものの、関わっている人たちがそれを価値ある資源として活用しきれていなかった面がある。

さらに、プログラム実施結果、講師として招いたゴーヤクラブのメンバー及びゴーヤクラブの活動は、児童への知識伝達の方角に向かうなど、望ましい成果が現れた一方、保護者の無関心、指導員の負担増加などマイナスの側面も浮き彫りになった。よって、プログラムに関わる関係者が受け取ったインセンティブには、不平等が生じているため、今後最も改善を要する点といえる。

本研究によって、「ゴーヤ」というツールを用いての世代間交流の場を設けることは可能性の一端は確認されたが、課題が明確になったため、今後の改善がのぞまれる。

参考文献

- Putnam, R.D. 1995, *Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy* Princeton: Princeton University Press (河田潤一訳, 2001, 『哲学する民主主義－伝統と改革の市民的構造』, NTT 出版)
- 小石真子・佐藤裕見子・三浦康代, 2014, 子育て支援ボランティアの活動と世代間交流の実態について, 日本健康医学雑誌 23 (2), 136-141
- 藤原佳展, 2012, 世代間交流における実践的研究の現状と課題－老年学研究の視座から－, 日本世代間交流学会誌 2 (1), 3-8
- 村山陽・藤原佳典・福島富士子, 2013, 地域高齢者の世代間交流型地域活動への参加とソーシャル・キャピタルとの関連, 日本世代間交流学会誌 3 (1), 41-47
- 恵小百合・伊藤勝・土屋薫・林香織, 2013, 新市街地形成過程の環境動態情報把握と「可視化」研究ノート－地域言語力」の構築：『流山熱環境調査』を通した方法試論－, *Informatio* vol.10, 43-49
- 森田久美子・青木利江子・小林美奈子・山本晴美・呂曉衛・永嶺仁美・佐々木明子, 2015, 学童保育における高齢者との世代間交流の継続的实践における課題, 日本世代間交流学会誌 5 (1), 11-20
- 廣田有里, 2014, 地域コミュニティの形成過程と高齢化－流山市美田地区の世代交代を事例に－, 江戸川大学紀要, 江戸川大学, 24 号, 301-305
- 内閣府, 平成 26 年年度版高齢社会白書 (概要版), <http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2014/gaiyou/index.html> (平成 26 年 10 月 1 日アクセス)
- 流山市, 流山市ホームページ, <http://www.city.nagareyama.chibajp/> (平成 26 年 10 月 1 日アクセス)

《注》

- (1) 厚生労働省 (2014) 2015.11.29 <http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000054557.pdf#search=%E6%94%BE%E8%AA%B2%E5%BE%8C%E5%AD%90%E3%81%A9%E3%82%82%E7%B7%8F%E5%90%88%E3%83%97%E3%83%A9%E3%83%B3>